

中学生

佳作

私にできる「これから」

武修館中学校3年

川辺 聖鈴

「ユニセフ基金」。これが私の生まれて初めて行い、呼びかけた基金です。小学校一年生の時、母の知り合いからの誘いでガールスカウトに入団した私は、地元の支援イベントなどでこのユニセフ基金への協力を呼びかけました。最初は何を行っているのかがわからず、ただただ先輩スカウト達が口にして言葉を真似し、会場を練り歩いていました。集まったお金も、ただ「貧しい国に送られる」とだけしか思っていませんでした。

学年が上がるにつれて理解の範囲も広がり、「国際理解」や「募金」、「基金」の意味を知ることになってきました。しかし、募金や基金を呼びかけている中で、年々疑問に思うことも多くありました。「こんなに少ないお金で発展途上国の人々を助けることができるのか」、「何に使われているのか」、そして大きな疑問としては「本当にこのお金は使われているのか」という疑問です。また、「何故毎年、募金や基金を行っているのに発展途上国は豊かにならないのだろうか」という疑問もありました。

小学三年生頃、あるテレビのドキュメンタリー番組で発展途上国とよばれる国の実態を追ったものが放映されていました。そこで私はとてつもない衝撃と驚きを感じました。今まで人から聞いた内容、子供向けに改編された冊子でしか知らなかった発展途上国の真実をテレビ画面越しに知ったのです。環境、治安、食糧難、紛争…と今まで知らなかった言葉が映像と共に目に焼きつきました。そして一番ショックだったのは、自分と年齢がさほど変わらない子供達が学校にも行けず、食事も満足に摂れず、体力を消耗する肉体労働に朝から晩まで従事していることでした。ただ、それと同じくらい嬉しいことも知りました。世界各国から届いた服や靴を嬉しそうに受けとる子供達の映像です。その時、初めて私は理解したのです。「きちんと役に立っている」と。形は違えど、子供達やその両親も幸せにしていると気付いたのです。

それから、中学三年生の現在までたくさんの募金や基金を呼びかけ、そして国際理解について知る機会がありました。その度に改めて知ることや学ぶことがあり、どれも無駄になることはなくしっかりと私の中に吸収されています。

これからの未来、少なくとも今に近い未来、世界中がどのようなになるのかは予想がつきません。しかし、「知る」という行為だけで救われる命があります。そして、より深く知り行動につなげることができれば、きっと変わるはずです。ドキュメンタリー番組で見た発展途上国の子供達の笑顔を忘れず、これからも支援活動に携わっていきたいです。